

[研究ノート]

教育と保育について学びほぐす

『教育の基礎と展開——豊かな保育・教育のつながりをめざして』を読む

佐藤 邦政

Unlearning the Relationship between Childcare and Education

— Reading “*Kyouiku no Kiso to Tenkai: Yutakana Hoiku. Kyouiku no Tsunagari wo Mezasite (The Foundation and Application of Education: Enriching the Relationship between Childcare and Education)*” —

Kunimasa SATO

This paper examines the “unlearning” of our educational experience by reviewing “*Kyouiku no Kiso to Tenkai: Yutakana Hoiku. Kyouiku no Tsunagari wo Mezasite (The Foundation and Application of Education: Enriching the Relationship Between Childcare and Education)*,” edited by R. Takano and K. Takeuchi (Tokyo: Gakubunsha, 2016). In essence, “unlearning” means for us to epistemically reconfigure what has already been learned and to reconsider beliefs that have implicitly been rendered stereotypical. The first part of this article reviews the content of the aforementioned book and articulates the feature considered unique in the literature on the foundation of education: highlighting the relationship between childcare and education. The second part develops the idea of “unlearning,” which was expanded by the Japanese philosopher Shunsuke Turumi (1922–2015), and argues that Takano and Takeuchi’s book enables the unlearning of the educational role of childcare and its relationship to education.

1. 教育と保育に対する疑問から始める

私たちは、さまざまな場面で、教育についてふとした疑問をもつことがある。たとえば、ある人は「さまざまなメディアで待機児童問題がしばしば取り上げられているけれど、私の家庭も子どもが生まれて、これから考えなければいけない。でも私の幼少期は、母親が専業主婦でずっと付きっきりで育ててもらったので、今の保育や乳幼児施設がどんなものなのかイメージがわからない。昔と今では子育ての環境はどんなふうに変わってきているのだろう」と疑問をもつかもしれない。また、別の人には「道徳の授業が必修になると学校の先生方から聞いていますが、私たちの学生時代の道徳の授業では、教室や体育館でみんなと遊んだ記憶しかありません。どうして今、道徳を必修にするのでしょうか」と、やや不安な気持ちでいるかもしれない。あるいは、「私は両親の仕事の都合で海外の学校に転校したんだけど、そこでいろいろな国籍や宗教の友達ができ、みんなそれぞれの違いを尊重していた。一緒に学んでいる友達の年齢もばらばらだった。はじめはびくびくしたけど、今ではそれが普通になった。どうしてこんなに日本の学校と印象が違うのだろう」と問題を感じている人がいるかもしれない。

このように教育についてさまざまな疑問が浮かんできても、日々の生活では、周りの人の話を聞いて「まあ、そんなものなのかな」として納得することが多いかもしれない。それでも、教育に関わる何らかの問いが、私たち一人ひとりにとって切実な問いとなる時、「どうして現在のような教育や保育になっているのだろう」、あるいは「望ましい教育や保育とはどのようなものなのか」を考えなおすように促されることだろう。また、教職を目指す学生など、これから教育・保育に関わろうと真剣に考えている、あるいは、現職の教師や保育士など、実際に教育・保育に関わっている人は、自分の教育・保育経験を振り返りながら、うえで挙げたような教育や保育に関する問いを問いなおしてみたいと思っているかもしれない。

しかし、このように、教育や保育について知りたいと思い、自分で考えてみようとしても、何から学び始めれば良いのかわからない、ということがしばしばある。そのようなときに最適なスタート地点を提供してくれる本が、高野良子・武内清編『教育の基礎と展開——豊かな保育・教育のつながりをめざして』（2016、東京：学文社）である。

この本は12章から構成されている。第1章では人間形成における教育の役割、第2章では教育と保育についての思想史、第3章では乳児期から児童期の子どもの発達、第4章では子育てにおけるケア、第5章では教育・保育に関する制度と行政、第6章では教育と保育に関する教育課程、第7章では子ども文化や生徒文化と学校組織の特徴、第8章では子どもの体力と運動の必要性、第9章では教育・保育におけるジェンダー、第10章では多文化共生と教育、第11章では地域社会における子供の教育の歴史と課題、第12章では生涯学習の理念と社会的状況が取り扱われる。さらに、各章の間には「Column」と呼ばれる短いコラムが置かれており、教育に関するより素朴で身近な疑問に答えたり、各章で説明された教育・保育内容に関わる具体的実践事例が紹介される。そこで取り上げられているテーマは、たとえば、キャリア教育、個性化教育、教育場面での挙手と指名という実践、子育て支援制度の目的、子どもの貧困、道徳の必修化、ICT活用の授業、食育、インクルーシブ教育、小学校英語、学校と地域連携など、現在の教育において注目されているホットなテーマである。

うへの記述からわかるように、本書は、現代の教育を特徴付ける重要なトピックがほぼ網羅されている。それゆえ、読者は、教育・保育に関する各自の疑問からスタートし、自分の興味に従って読みすすめ、現在の教育・保育に関する背景や多様な側面について知ることができる。

しかし、このように教育や保育の重要なテーマが網羅されていることのほかに、本書が教育・保育について学ぶためのスタート地点としてふさわしいと私が考える別の重要な理由がある。編者によると、「本書は、教育の本質や問題を理解すると同時に、教育と保育に関して、新たな学びの世界へと導く仕掛けに満ちている」(p. i)。実際、さきに言及した、各章後の

コラムは、平易な言葉で教育・保育の実践例を紹介することで、読者を教育・保育についての新たな学びへ誘導する仕掛けの一つと言えるだろう。以下では、この教育・保育に関する新たな学びへのいざないという本書の特徴について、二点に絞って詳しく説明しよう。

一点目は、本書は、教育のほか、保育について多くの章を割り当て、詳細に説明を提示している点である。これまでの教育基礎に関わる概説書では、学校教育が中心的に扱われることが自明になっていることが少なくない。それに対して、本書では、さまざまな観点から保育が検討される。具体的には、教育と保育の概念的な違い（第4章）、乳幼児施設の社会的状況の歴史的推移（第4章）、保育に関する現在の制度の在り方（第5章）、保育に関するカリキュラムの歴史的変遷とその内容（第6章）、あるいは、保育におけるジェンダーやその重要性（第9章）などが取り上げられる。実際、冒頭で一例として示した、保育に関する素朴な疑問も本書の中で答えられている。

教育の歴史をすこし繙くと、このような教育と保育の密接な関連性はまったく不思議なことではない。日本語の「教育」は、江戸末期の役人、箕作麟祥によって「education」が翻訳されたものであるが、その起源であるラテン語「educare」は、「産育」という意味であり、出産から養育、そして、しつけや社会化など、人が生まれてから育っていく総体の営みを指す言葉であった（寺崎 1997, pp. 101-107）。それが、「教育」という言葉に翻訳され、学校教育や知識詰め込み教育など学校的な営みが連想されるようになったのは、おそらく、明治時代、近代西洋文明の輸入とともに入ってきた近代教育制度がやがて全国に広まり、浸透していったことに起因する。その意味では、「education」の訳語である「教育」が学校的な営みを意味するようになったのは歴史的な偶然でしかない。

このようなことを考えると、本書は、これまで焦点に当てられることの少なかった、保育と教育のつながりについて十分に配慮する意欲的な教科書と捉えることができる。本書により読者は、教育と保育に関する現在の動向を知るだけでなく、これまでの教育史の流れにおいて、現在の教育

と保育を位置付けることで、これまでの教育観や保育観について再考する大局的視点をもつ準備ができるだろう。

2. 教育と保育について学びほぐす

本書における教育・保育に関する新たな学びの世界へ導く仕掛けの二点目は、本書が、教育・保育について初めて学ぶのではなく、みずからの教育・保育経験を通して漠然と抱いている教育観や保育観について、あらためて「学びほぐす」ことを促す点にある。

このことを説明するため、まず、「学びほぐす」という言葉について説明しておこう。この「学びほぐす」という言葉は、日本人哲学者・鶴見俊輔の用いた用語である。彼は、ハーバード大学の学生時代、ヘレン・ケラー女史と言葉を交わす機会をもち、そこでヘレン・ケラーにより使われた「unlearn」という英語に対して「学びほぐす」という訳語を与えた。鶴見は、医師の徳永進との座談の中で、そのときのエピソードについて次のように述べる。

戦前、私はニューヨークでヘレン・ケラー（1880 - 1968）に会った。私が大学生であると知ると、「私は大学でたくさんのことを学んだが、そのあとたくさん、学びほぐさなければならなかった」といった。学び（ラーン）、のちに学びほぐす（アンラーン）。「アンラーン」ということばは初めて聞いたが、意味はわかった。型通りにセーターを編み、ほどいて元の毛糸に戻して自分の体に合わせて編みなおすという情景が想像された。／大学で学ぶ知識はむろん必要だ。しかし覚えただけでは役に立たない。それを学びほぐしたものが血となり肉となる。／徳永は臨床の場にいることによって、「アンラーン」した医者である。アンラーンの必要性はもっと考えられてよい。

（鶴見 2010, pp. 51-52）

ここで鶴見は「学びほぐし」を、セーターの絡まりを一度、丁寧にほぐして編み直すという卓抜な比喻によって説明している。まず、型通りにセーターを編むように、私たちは教育や保育についての基本知識を学ぶ。しか

し、実際の教育・保育現場では、そのままの知識では実践に役に立たない場面に遭遇することも多い。そのようなときに重要となるのは、型通りに仕上げたセーターを実際に着てみて、実際の着心地や用途に沿って、自分の体形や日常的に行う仕草に合うものへと編みなおす作業をするのと同様に、従事する教育・保育現場の中で、児童や生徒の声を聴き、同僚との協働や話し合いなどを通して、既習の知識を個別状況に活かせるよう仕立て、より良い教育や保育を模索する態度をもつことだろう。鶴見が、実践を通じた学びほぐしの重要性を強調する理由の一つはここにあると考えられる。

だが、「学びほぐし」における日本語の「ほぐす」という言葉に注目するならば、鶴見の用いる「学びほぐし」はさらに別の重要な意味があると考えられる。それは、私たちは各自の実践と突き合わせながら、気付かないうちに固定観念となっているものの見方や考え方について解きほぐす、ということである。このような意味での学びほぐしは、大学などで学ぶ理論知識と現場の実践を二項対立させて考え、学習者から実践者に移行する際にのみ生じる、というものでは決してなく、従事した実践を続けていく中で絶えず生じる可能性がある。たとえば、具体的実践に従事しながら、そこで暗黙裡に当たり前となっていた前提を再認識し、その真偽を確かめ、新たな内容へと更新することや、実践との関わりを通して特定の事象について、より複雑な真相や仕組みを理解する。このような意味での学びほぐしは、教育や保育にも当てはまるだろう。具体的には、教育・保育の文脈における学びほぐしとは、各自が足場を置く具体的で個別的な実践に基づいて各自の教育観や保育観を築く一方、たえず、新しくてより良いものの見方や考え方に触れて、そのような教育観や保育観を点検し、修正していく、ということになるだろう。

このように、鶴見が「学びほぐし」という用語を用いて強調することには、自分の考えを構築しながらも、たえず異なる可能性に開かれ、自分の考えを建て替えながら更新していく、ということが含まれていると考えられる。

ところで、「学びほぐす」の元の語である「unlearn」という英語は、直訳的には「学習内容を忘れ去る、古い習慣を捨てる」という意味であり、鶴見がうへの引用中で説明するような意味での「学びほぐす」という含意は原義にはない。このことを私が知った経緯について簡単に説明しよう。

2016年9月に私は、オクラホマ大学のHuman Flourishing研究所で、現代の著名な哲学者で倫理学者であるLinda Zagzebski教授や、研究所所長で倫理学者Nancy Snow教授と交流する機会をもった。研究滞在中のある日、エジンバラ大学で哲学博士号をとり、教育認識論研究における同僚Lani Watson氏と鶴見の「学びほぐす」というアイデアについて長く話をする機会があった。Lani氏はそこで、「鶴見氏による説明は学びを考えるうえで非常に面白い発想であるが、その含意は英語の「unlearn」という言葉にはないと思われるので、詳しい説明が必要だろう」という趣旨のことを言われた。このことは逆に言えば、鶴見の「学びほぐし」に関する説明は、鶴見独自の哲学思想に裏打ちされたものである、ということを示唆する。実際、鶴見は「unthink」など、ほかの語でも「un」という接頭辞に注目しており、それにより、学ぶことや考えることに関して、気付かぬうちに固定観念となっていた見方や考え方を解きほぐすことの重要性に注目する。ここには、鶴見の（プラグマティズムなどの）哲学思想の一端が現れていると解釈することができると思われる。しかし、このような理由があるからこそ、鶴見の「学びほぐす」というアイデアは、学びの研究者だけでなく、学びに関心をもつ多くの人の関心をひく、一つの学びの思想になっているのだろう（e.g., 荻宿・佐伯・高木〔編〕、2012）。

さて、以上のような学びほぐしの観点から、教育と保育に関する本書の特徴について考えよう。本書とともに「学びほぐす」とは、これまでの教育・保育経験について振り返る中から、気付かぬうちに固定観念となっていた事柄について再度、解きほぐす、ということである。本書には、基本知識の習得のほか、一見、自明と思われがちな教育・保育に関わる事象について、読者が学ぶほぐすための工夫がちりばめられている。たとえば、第7章（武内清担当）を取り上げよう。この章では、家庭と学校の役割や特

徴や学校に特有の子ども文化や生徒文化について概説されたうえで、「Let's try」という読者に対する質問コーナーにおいて、読者みずからの学校生活を振り返り、どのような子ども文化や学校文化があったかを考えるよう工夫されている。このことは、各自経験してきた学校や保育現場を他者とともに振り返り、自明と思われていた自分の教育観や保育観を相対化して、これからの子ども文化や生徒文化について各自で考えていくためのきっかけとなるだろう。

以上のように、本書は、読者が教育と保育に関する基本知識を得るだけでなく、現在までの知識を学びほぐすきっかけを与える機能を十分に果たしている。これが、編者によって「教育の本質や問題を理解すると同時に、教育と保育に関して、新たな学びの世界へと導く」と言われる実質であると私には思われる。

最後に、本書に関して一点、不満な点を述べておこう。それは、巻末などに、各章で扱われた教育・保育のテーマに関連する先行研究を紹介するコーナーがあってもよかったのではないかと、いうものである。本書により、自分の過去の教育・保育経験と突き合わせながら、教育・保育についてさらに深く学んでみたいと動機付けられる読者が出ることだろう。「Let's try」や「Column」など、本書には教育や保育について学びほぐすきっかけを与える見事な仕掛けが用意されているのだから、読者に「次に何を読み進むと理解が深まるか」という方向を示唆する仕掛けがあってもよかったように思われる。しかし、それでも、学びほぐしのきっかけを活かして、さらなる学びへつなげていくかどうかは、多分に読者自身にかかっている。

(参考文献)

- [1] 今井むつみ (2016). 『学びとは何か——〈探究人〉になるために』. 東京：岩波書店.
- [2] 荻宿俊文・佐伯胖・高木光太郎 (編) (2012). 『まなびを学ぶ』. 東京：東京大学出版会.
- [3] 佐伯胖 (1975). 『「学び」の構造』. 東京：東洋館出版社.
- [4] 寺崎弘昭 (1997). 「教育と学校の歴史」、藤田英典・田中孝彦・寺崎弘昭著

- 『教育学入門』所収 (pp. 85-119)、東京：岩波書店。
- [5] 桐光学園+ちくまプリマー新書編集部 (2015). 『何のために「学ぶ」のか 〈中学生からの大学講義〉1』. 東京：筑摩書房.
- [6] 鶴見俊輔 (1996). 『学ぶとは何だろうか 鶴見俊輔座談』. 東京：晶文社.
- [7] 鶴見俊輔 (編) (2010). 『新しい風土記へ 鶴見俊輔座談』. 東京：朝日新聞出版.
- [8] 渡部信一 (2005). 『ロボット化する子どもたち——「学び」の認知科学』. 東京：大修館書店.
- [9] 渡部信一 (編) (2010). 『「学び」の認知科学事典』. 東京：大修館書店.